

「人間は生まれつき知ることを欲する」のか  
—アリストテレス『形而上学』の最初の文について—

松浦和也

1. 哲学への激励？

アリストテレスの言葉として知られる名言は数多くあるが、日本で最もよく知られているであろうものは、『形而上学』冒頭の次の文である。

すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。

この文は πάντες ἀπόροτοι τοῦ εἰδέναι ὀρέγονται φῶσει (980a21) に出隆が与えた訳であるが、多様なアリストテレスの立場を包含する洗練された訳ではある。哲学とは「知を愛する」ことであり、人間すべてが「知る」ことへと向かう欲求を有することをこの『形而上学』のギリシア語テキストは意味するならば、哲学あるいは哲学することは人間の本性に根差した特性である、という主張すら含みそうである。そして、このような主張は、ギリシア古典期からしば

しばば表明されている哲学無用論に対しても、異論として機能する。人間が生物として持つような食欲や睡眠欲と同様、「知る」こともまた人間の本性あるいはピュシス (ψυχή) に根差した欲求だとすることは、言わば自然主義的立場からの哲学擁護にもなりうる。

難解さで知られるアリストテレスの『形而上学』が、このように哲学探究の精神を鼓舞する文で始まることは、われわれを勇気づける。事実、この最初の文をこのように哲学への激励として理解することにも長い伝統がある。アリストテレスが書いたが、今は断片の形でしか残っていない『哲学のすすめ』あるいは『プロトレプティコス』(Προπαιητικός)の一部は新プラトン主義者のイアンブリコスを通じて知られているが、その一部が『形而上学』冒頭部と類似していると指摘されることがある。<sup>(1)</sup>そして、イアンブリコスが『哲学のすすめ』を再構成するとき、『形而上学』の最初の文を念頭に置いていたならば、この文はまさに哲学探究を目指す者に向けた激励だと伝統的に解されてきた証左となる。<sup>(2)</sup>

しかし、概して古代哲学者の名言や立場と見なされているものには、実際に確かめてみると、出典が存在しなかったり、後世に作られたものであったり、あるいは明らかな誤解に基づくものであったりする。もちろん、この最初の文は『形而上学』に明記されており、現在流通しているテキストを確認した限り、写本間の異読も報告されていない。だが、ギリシア語のテキストをそのように訳しうるといことは、必ずしもそのような訳や理解が妥当であることの意味しない。

訳や解釈の妥当性は、古代のテキストに現れるあらゆる文がそうされているように、彼の他の発言との整合性や、置かれた文脈から診断されなければならない。本論の目的は、このような観点からの検証を行うことを通じて、出による名訳が与える印象は異なる理解を提示することにある。

## 2. 哲学の強要？

出訳に即した場合の、『形而上学』の最初の文の論理的含意を展開することから始めよう。この文がもし「あらゆる人間は生まれつき知ることを欲する」と訳されるのであれば、第一に次のことを主張しうる。

生まれつき知ることを欲さない者は人間ではない

また、「生まれつき」と訳された *γεννητός* をより広い意味で取り、「自然において」あるいは「自然的」と理解した場合は、次のことも主張しうる。

知ることを欲さない人間は、自然的ではない。

このように理解の可能性を追ってみると、一見無害で、哲学することへの誘いを主張するだけだった『形而上学』の最初の文は、いささか独断的で暴力的な装いを見せる。知ることを欲さない人間は不自然である。知ることを欲さない人間は人間とは言えない。さらに、もし「知る」 *εἰδέναι* を意識して、Loeb版アリストテレス『形而上学』のよ  
うに「あらゆる人は自然的に知識を求めると理解した場合は、<sup>③</sup>

知識を欲さない人間は、自然的ではない。

というさらに強烈な主張へと変貌する。知識欲を持たない人間は人間とは言えない。アポストルはこの主張のような理解を採用しているようである。彼によれば、「自然的」*phorai*は知識を欲さない人間たち、すなわち生まれつきやその他の理由によって障害を持った人々を排除するための語である。<sup>(4)</sup>だが、実際には知識を欲さない人間も沢山いることをわれわれは経験的に知っている。すると、少なくとも人間は「不自然な」人間か、そもそも人間ですらないことになる。

さらに厄介なことに、アリストテレスの「自然」概念は規範性を持つことがある。たとえば、『動物の部分について』第4巻第10章 $\theta\sigma\tau\alpha\tau\epsilon\iota\tau\alpha$ の「自然は可能な事柄から最善を成す」という文言は自然の規範性を示唆する一例である。<sup>(5)</sup>この自然の規範性を読み込むと、『形而上学』の最初の文は、

あらゆる人間にとって知ることを欲することは善いことである。

あらゆる人間にとって知識を欲することは善いことである。

という含意があるとも解しうる。無論、この主張自体は哲学者への激励に他ならず、無害であるように見える。だが、自然の規範性に即し、自然や自然に即したものが善いものであるのに対し、自然に反するものは（たとえ悪くはなくても）善くはないと捉えた場合、この含意は再度攻撃的なものに変容する。

知ることを欲さない人間は善くない。

知識を欲さない人間は善くない。

知ることを欲さない人間は劣った人間であり、知ることを求めない人間は、もし自身が善くなることを求めるならば、知ることを求めなければならない。それゆえ、あらゆる人間は人間である限り、哲学すべきなのである。このように解すると、最初の文は「哲学のすすめ」どころか、「哲学の強要」に他ならない。

出が『形而上学』の最初の文における *phorasi* を「自然」ではなく、「生まれつき」としたのは、このような自然の規範性による攻撃性を和らげる目的もあったのかもしれない。しかし、検証せねばならないことは、「あらゆる人間は知ることを欲する」や、「知識を欲さない人間は善くない」という見解にアリストテレスは賛同するか否か、あるいはどのような意味で賛同するか、である。

### 3. 誰もが知識を欲するべきか？

アリストテレスが人間の善さを、知ることや知識、あるいは哲学に定位していることは疑いえない。『ニコマコス倫理学』第1巻第7章以下で表明される幸福の一般的理解を思い起こそう。彼は幸福概念の探求の過程で人間の固有の働き (*ergon*) に着目する。その固有の働きはロゴスを持った魂の部分の活動であり (EN. I 7, 1097b22-25, 1098a1-8)、人間としての善さは「徳(卓越性)」に基づく魂の活動」(1098a16-17) である。このような論述からは、「知ることを欲する」ことは人間固有の善さである知性的能力の発現であり、それが発現している限りでその人間は幸福である、という主張を導くことができる。

また、有名な見解であるが、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第1巻第5章で人間の生活を「享楽の生活」、「政治の生活」、「観想の生活」に分類し (1095b17-19)、同書第10巻第8章で思考の幸福をある種の観想活動とする (1178b7-8)。この見解からも規範的主張を導出できようである。知ることを欲することは、人間が幸福になるための

必要条件であって、あらゆる人間は知ることを欲さなければならぬのである、と。

しかし、この規範的主張は『政治学』で表明される人間観と整合しない。

保全のために、支配する者と支配される者が自然に一对となる。つまり、思考 (*diánoia*) の働きによって将来を見据えうる者が自然によって支配する者であり、主人となるものである。他方、身体の働きて事柄をなしうる者が支配される者であり、自然による奴隷である。それゆえ、主人にとつても奴隷にとつても同じものが有益である。(Pol. I, 2, 1252a30-34)

支配する者と支配される者が一对になることは自然なことである。そして、支配する者と支配される者は、人為によって決まるのではなく、自然によって決まる。前者は思考能力によって判断の結果を予見できる者であり、後者は前者に従い、前者が判断したことを自身の身体を通じて実行する者である。<sup>(6)</sup>

その現代的妥当性はさておき、『政治学』で表明されるいわゆる「自然による主人」と「自然による奴隷」の区別は目下の検討には重要である。というのは、自然による奴隷の特性は、生まれつき知ることを欲するわけではない人間が存在することを示唆するからである。そこで、この自然による奴隷の議論を追ってみよう。以下の引用は、自然による奴隷が生得的能力によって分けられることを示唆する。

支配することと支配されることは、必然的なことに属するのみならず、益をもたらすものにも属する。また、あるものの一方は支配されるために、他方は支配するために、生まれたときから (*ek yevetig*) 即座に区別される。(Pol.

ある人間が支配被支配関係のいずれに属するかは、生まれたときから決まっている。おそらく、その決定要因はものの原理を理解し、未来を予見する能力を持つ魂の知性的部分を十分に持つか否かにあり、その知性的部分を特定の間が成人した後に発揮できるかどうかは生まれたときから決まっており、後から得られるものではない、とアリストテレスは考えているのだろう。<sup>(7)</sup>

そして、魂の知性的部分を十分に持たない自然による奴隷が支配する側に立つことをアリストテレスは勧めていない。

魂が身体から、そして人間が野獣から区別される分だけ区別される者たちがいるが、(このあり方が、その身体の使用がその働きである者の状態であり、この働きが彼らによる最良のことである)、こうした者たちが自然による奴隷である。彼らにとって、先の支配によって支配されることがより良い。これは先にも述べたことである。なぜなら、他の者に属することが可能な者が、自然による奴隷であり、(それゆえ、実際に他の者に属している)、ロゴスに与えることはあるが、それは感覚する分であり、所持はできない。(Pol. I 5, 1254b16-23)

自然による奴隷は、支配されることが彼らにとっても善い。この主張と魂の知性的部分の生得性を合わせて考えると、成人した後には開花するか否かが生まれつき決まっている知性的部分を誰もが獲得することは不可能であるし、仮に知性的部分を持つ人のように振る舞うことで支配する側に属したとしても、その人にとっては悪いことになる。

この引用中でさらに注目すべきは、自然による奴隷は、ロゴスに与えることはできても、感覚すること程度までであつて、ロゴスを持つことはないと言われていることである。つまり、知性的部分を所持し、その能力を発揮できる自然による主人が発言したことは表面的に理解できるが、その発言したことの背景にある理論や真意を自然による奴隷は把握することはできない。そうであるならば、理論による正当化を含んだ知識を自然による奴隷はそもそも獲得できないことになる。それにも関わらず、自然による奴隷が生まれつき知識を求めることがあり得るとアリストテレスは考へるだろうか。

『政治学』第1巻第7章で分析される奴隷の知識と主人の知識の分析も、同じ視点から描かれているように思われる。主人的な「知識」と奴隷的な「知識」がありうるならば、奴隷が持つべき知識は日常の務めや料理術といったものであり (Pol. I, 7, 1255b24-27)、主人が持つべき知識は、奴隷を使用する知識である (b31)。ただし、このような知識は価値あるものではない (b33-34)。むしろ、そのような知識を活用することを主人は拒み、むしろ別の道を歩む。

それゆえ、自身を惑わせないだけのものを持つ人であれば誰でも、その勤めを委託人に任せ、自身は国政に励むか、あるいは哲学する。(Pol. I, 7, 1255b35-37)

つまり、自然による主人は、奴隷を支配する術を行使するよりも、国政に励むか、哲学に励む。ここで着目したい語は、「哲学する」(φιλοσοφῆσαι)である。この語をアリストテレスが用いた背景のひとつは、哲学に励むことが可能なのは、知性的能力を有する自然による主人であり、その能力を欠いた自然による奴隷は哲学に励むことはできない、という見識があるように思われる。



以上のように、『政治学』から垣間見える人間観によれば、知性的能力を生まれつき欠いた、自然による奴隷に分類される人間が社会の中に存在する。そして、そのような人間は知識を持つことができない。そのような人間が知識を欲し、哲学することはおそらく難しい。ただし、そのような人間が知識を欲することがないとしても、悪いわけではない。少なくとも社会的観点から見れば、知性的能力を持った自然による主人の下で身体的活動を行うことは、主人にとっても奴隷にとっても有益だからである。

このような理解が正しければ、自然による奴隷の説は『形而上学』の最初の文と齟齬を起こすことになる。人間の中には生まれつき知識を獲得できない者もいるからである。それにも関わらず、そのような自然による奴隷にも知識を欲することを強いることはおそらく自然に反しているし、彼らにとっても善くないことだ、とアリストテレスは判断するのであろう。

#### 4. 「知る」とはいかなることか？

『政治学』が窺わせる人間観と『形而上学』の最初の文の齟齬を回避する手段を検討しよう。第一の道は、「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」の「すべての人間」を、十分な知性的能力を持った人間に制限することである。しかし、この制限を正当化することは難しい。なぜなら『形而上学』第1巻第1章の人間は専ら生物学的人間を指示しているように思われるからである。動物が感覚を持つ者として自然に生じてくると主張するとき(Met. A1, 980a27-28)、『アリストテレスが特定の動物を想定しているとは考え難いし、「人間という種」(γένος)は技術や推論によっても生きている」(980b27-28)と発言するときも、ある限られた人間の集団を想定しているとも考え難い。

第二の可能性は、『形而上学』の最初の文はアリストテレス独自の主張ではなく、一種の通念、すなわちエンドク

サ (ἐπίστα) と見なすことである。もし最初の文が通念であれば、他の著作に現れる人間観との整合性に悩む必要はない。『トポス論』第1巻第1章の一般的説明によれば、通念とは、一種の思いなし (ἀσέβη) であり、その所有者はすべてあるいは大多数の人間か、すべてあるいは大多数の知者たちか、最もよく知られた著名な知者である (100b21-23)。ただしこのような通念をアリストテレスは、可能な限り正当化しようとは考えているが、そのすべてを正当化することを義務とは考えてはいない。<sup>10)</sup>

しかし、『形而上学』の最初の文は通念ではないだろう。<sup>11)</sup> 第一に、大多数の人間がこのような見解を保持しているとは考え難いし、このような主張を残したソクラテス以前の哲学者は知られていない。第二に、最初の文は正当化が必要な主張だとアリストテレスは見なしている。

感覚への愛好 (ἡ τῶν αἰσθητικῶν ἀπόλησις) がその証拠である。(Met. A1, 980a26)

彼は、最初の文の主張を支持する証拠を以降の考察を通じて提示しようとしている。最初の文が彼自身によってその根拠を説明すべきものであるなら、最初の文の内実は彼が真と認めるようなものであるだろう。

とは言え、以降の考察がどのように最初の文を正当化するのは明確とは言い難い。人間が感覚を愛好することは、それだけで人間が生まれつき知ることを欲することの証拠にはなりそうにない。したがって、最初の文の根拠は、『形而上学』をもう少し読み進める必要がある。しかし、どこまでが最初の文の証拠として提示された議論なのか。この問いに対する応答は、最初の文の「知る」 τὸ ἐπίσταをどのように翻訳するかという問題と絡み合う。

先に、Loeb版の『形而上学』が τὸ ἐπίσταを knowledge と訳したことを紹介したが、このような訳は頻繁に提示さ

れる<sup>(12)</sup>。また、ポリテイスは、τὸ εἰδέναιをγνώσιςと同種のものとし<sup>(13)</sup>、トリコは「知ってゐる」εἰστασθαίと同義であると注釈を付けている<sup>(14)</sup>。このεἰστασθαί (eirstauai) から派生する言葉が、「知識」ἐπιστήμηである。

この翻訳と『形而上学』第1巻第1章の議論構造の理解は関連している。この章の課題は、続く第2章と合わせ、知恵(σοφία)に関する分析である<sup>(15)</sup>。また、この分析から、この章では知恵と原因の理解には密な関係があること、すなわち「知恵はある種の始原(ἀρχή)や原因(αἰτία)に関する知識(ἐπιστήμη)」(Met. A 1, 982a2)であることが導出される。その導出のために、アリストテレスは次のトピックの順で考察を進める。

最初の文	980a21
感覚と視覚	980a21-27
記憶	980a27-b25
経験	980b25-981a2
技術	981a2-b17
知識	981b17-25
知恵と原因	981b25-982a3

『形而上学』第1巻第1章は、われわれが「知る」仕方をその階層の下から叙述し、発生論的に展開することで、知恵概念の妥当な理解を得ることを目指すものである。

さて、このように議論進行を整理すると、最初の文のτὸ εἰδέναιを「知識」と訳したり、εἰστασθαίとの同義性を指摘したりする解釈は、知識を扱う981b17-25との関連を重視することになる。そして、この理解に即せば、最初の文

の根拠は『形而上学』第1巻第1章の全体だ、ということになる。つまり、人間が感覚から知識へと至る道は発生論的に説明でき、それゆえ、人間が知識を獲得することは自然なことであることが示されていると、『形而上学』第1巻第1章をとらえる。したがって、最初の文の主題も知識であり、文中の τοῦ εἰδέναι も「知識」と翻訳することができ。ロスが『分析論後書』第2巻第19章を挙げて、感覚から知識が形成される過程を参照するように註を残していることも、このような読み筋を期待しているように思われる<sup>(16)</sup>。

しかし、この読み筋には疑念が残る。再度、最初の文の「人間」に「すべて」*πάντες* が付されていることに注目しよう。このような読み筋が妥当であるなら、知識に到達するのは、すべての人間である。しかし、そのような期待を『形而上学』第1巻第1章の論点は示していない。

行為することに対しては、経験は技術と異ならないように思われる。むしろ、経験を持つ者 (*ἐμπειροῦ*) は、経験を欠くがロゴスを持つ者のよりもより適切である。(Met. A.1, 981a12-15)

実際の行為においては、経験による行為と技術による行為には差異がないどころか、経験を持つ者は、理論だけの者よりも適切に行為する。この引用において着目すべきは、経験を持つ者と、理論(ロゴス)を持つが経験を欠いた者が区分されていることである<sup>(17)</sup>。ここで言われる「経験を持つ者」とは理論を持たない者であろう。その後、経験を持つ者と技術者を対比し、経験を持つ者は事実 (*τὸ εἶναι*) を知っているが、原因 (*αἰτία*) を知らず、他方、技術者は原因を知っていると彼は分析するが (Met. A.1, 981a28-29)、「経験を持つ者もいつかは原因を知り、技術者となる」といった主張を残していない。

したがって、『形而上学』第一卷第一章は、すべての人間が知識に到達する、あるいは到達しうることを証明する議論ではない。それゆえ、同章最初の文を、あらゆる人間が知識を欲する、と解することは不可能なのである。

では、この最初の文は何を意味しているのか。「知る」に該当する動詞として、アリストテレスが *gignoskhai* ではなく、*eidēnai* を選んでいることに改めて注意しなければならない。ギリシア語の *eidēnai* は、*oîsō* の完了不定形であるが、[S]によればこの語の中心の意味は「心の目によって見る」ことにある。その観点から、最初の文に続く議論を確認してみよう。

感覚への愛好がその証拠である。実際、感覚は、その有用性から離れても、感覚自体のゆえに好まれる。そして、何よりも目を通じてもたらされる感覚が好まれる。なぜなら、何かを成すために見ることを好むだけではなく、何も行なおうとしない場合も、いわば他のことに勝って好むからである。この理由は、感覚のうちで最も勝つて視覚が我々にもを知らしめ (*gnōskōn*)、多くの区別を明らかにするからである。 (*Met. A.1, 980a26*)

この短い一節には、感覚の愛好の説明や視覚の優位性など、複数の論点が組み込まれている。ただし、「知る」に関わる論点は末尾に見られる一文である。すなわち、視覚はわれわれにもを知らしめ、区別を明らかにする、というものである。このような理解は、ギリシア語の *eidēnai* の射程のうちに入る。つまり、最初の文の「知る」が意味していることは、人間が知識を得ることではなく、感覚を通じて個々の感覚的対象の違いを人間が把握することである。

このように理解することが安全な読み筋であろう。人間が動物の一種である限り、感覚能力を必然的に持つ。それゆえ、感覚対象の違いを把握することは、すべての人間が成しうることである。また、このように理解する限り、『政

「治学」が匂わす人間観とも対立することもない。自然による主人も自然による奴隷も、感覺能力を有しており、それを通じて感覺的対象の違いを把握するだろうからである。

このような理解が妥当ならば、『形而上学』第1巻第1章の構造は、次のようなものである。あらゆる人間は、感覺能力を通じて感覺的対象を区別することで物事を知る。そして、その区別から人間（および一部の動物）には記憶や経験が発生し、さらに一部の人間にはさらに技術や知識が発生する。つまり、知恵の特性を明らかにするために、動物も共有するような知り方から、次第に学的な知り方へと「知る」が発展する様を『形而上学』第1巻第1章は描写しているのである。

## 5. 人間は生まれつき知ることを欲するのか

人間は生まれつき知ることを欲するのか。この問いに対し、ある意味ではそうであり、ある意味ではそうではない、とアリストテレスは答えるように思われる。つまり、あらゆる人間が感覺を通じて事物を区別することが一種の「知る」である限り、人間は生まれつき知ることを欲する。しかし、より高度な、物事の原因を理解し、物事に説明を与えることができるように高度に「知る」こと、すなわち技術を得ることや、知識を得ることは、あらゆる人間が欲することでもなければ、実際に誰もが達成できることでもない。およそ人間が物事を「知る」という事態については、アリストテレスは個々の人間の持つ能力が生まれつき異なることを認める現実主義者であって、理想主義者でもない。楽観主義者でもない。

もちろん、『形而上学』の最初の文である「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」は、単独で読めば、「哲学の勧め」、あるいは理念の記述として捉えることは可能であるし、実際にそのように扱われてきた。しかし、こ

の文は人間が感覚を通じて物事を知るといふ、人間が動物として生まれつき持つ特性を淡々と表現するものである。それゆえ、この最初の文は哲学の勧めでもなければ、ましてあらゆる人間が哲学へ向かうことを強要する勧告でもない。

このように最初の文を理解することは、既存の解釈の雄大さに比すると、哲学者アリストテレスを矮小化させてしまふように感じられるかもしれない。だが、この理解が妥当であったとしても、多分野に渡る彼の知的成果が色褪せることはないだろう。むしろ独断主義から彼を救い、「知識を欲する」哲学者としての彼の像がより輝くように思われるのである。

### 【参考文献】

- Apostle, F. G. *Aristotle's Metaphysics*. The Peripatetic Press, 1966.
- Cambiano, G. 'The Desire to Know: *Metaphysics A 1*'. In Steel C. (ed). *Aristotle's Metaphysics Alpha: Symposium Aristotelicum*. Oxford University Press, 2012.
- Hussey, E. 'Aristotle on Earlier Natural Science'. In Shields, C. (eds), *The Oxford Handbook of Aristotle*. Oxford University Press, 2012.
- Jäger, W. *Aristoteles: Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung*. Weimann, 1923.
- Newman, W. L. *The Politics of Aristotle* (Vol. 2). Cambridge University Press, 1887.
- Pollis V. *Aristotle and the Metaphysics (Routledge Philosophy Guidebook)*. Routledge, 2004.
- Ross, W. D. *Aristotle's Metaphysics: A revised text with introduction and commentary* (Vol. 1). Oxford University Press, 1924.
- Torricot, J. *Aristote La Métaphysique* (Tome 1). Librairie Philosophique J. Vrin, 1974.
- Tredennick, H. (trans). *Aristotle Metaphysics Books I-IX* (Loeb Classical Library). Harvard University Press 1963.
- 出隆(訳)『アリストテレス全集12 形而上学』岩波書店、1968年

注

- (1) Jager, 68, Ross, 115.
- (2) 「*κατα*」も「見る」ことをそれ自体でわれわれが愛するのであれば、このことはあらゆる「人間」が「思慮すること」(*to epovai*)と「認識すること」(*to gignoskein*)を特に愛することを十分に示すだろう」(Prot. 7. 43. 25)。ただし、この文はイアンプリコスによる挿入であると推察されている。廣川、21-22, 39.
- (3) Tredennick, 2.
- (4) Apostle, 254.
- (5) cf. *Phys.* VIII 7, 260a22-23, EN, I 9, 1099b21-22.
- (6) cf. Newman, 106-107
- (7) 生得的能力については、*EE*, VIII 2, 1247a9-13.
- (8) この区別が導入される『政治学』第1巻第7章1255b22-23は、「直説法 (*ecti*) ではなく、可能性を表す希求法 (*ev ein*) と書かれてゐることは注意を要する。この表現は、主人的な知識と奴隸的な知識が、厳密な意味での「知識」ではないことを示唆するからである。内容から見て、奴隸的な知識は『形而上学』第1巻第1章における「技術」に精々該当するのみで、科学的で、その内容の理由付けを求めるような「知識」ではないだろう。
- (9) 『魂について』第1巻第2章におけるアナクサゴラス批判の中にも、次の指摘が見られる。「少なくとも思慮に即して語られる知性は、すべての動物に同等に備わっているようにも、人間にも備わっているように見えない」。(DA, I.2, 404b5-6)
- (10) 「*κατε*」他の場合と同じように、観察事実 (*ganoivetai*) を提示しつつも、まず問題点を提示して「この「アクラシアという」状態に関するすべての通念、そうでなくとも最大数で最有力な通念を示さねば (*denkoyvetai*) ならない。仮にすべての難点が解消され、通念が残されるならば、十分に示されたことになるだろう」。(EN, VII 1, 1145b2-7)
- (11) Cambiano, 2.



- (12) Tredennick, 3, Shields, 19, Hussey, 19.
- (13) Politts, 24.
- (14) Tricot, 2.
- (15) Ross, 115.
- (16) Ross, 115. なお、より正確には『分析論後書』第2巻第19章99b35-100a14を指示している。また、この箇所には、感覚から記憶が生じ、記憶から経験が生じ、さらに経験から技術と知識が生じるといふ『形而上学』第1巻第1章と同様の論点が展開される。
- (17) cf. *Met. A*, 981a26-27.